

## I 外国語科・外国語活動 研究テーマ

自分の考えや気持ちを伝え合う活動を通して、外国語を用いたコミュニケーション能力を積極的に高めようとする子どもを育む学び

## II 研究の重点

よりよいコミュニケーションを実現するために、自らの「学びのものさし」を更新していく手立てを工夫する。

## III 2年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) ゲーミフィケーションを取り入れたり、単元を組み合わせたりすることによって、場に応じた言語材料の幅を拡げる

ゲーミフィケーションを取り入れた活動を実践した。トレーディングゲームを通して、グループで協力したり他と交渉したりするなど、外国語を用いて考え、判断・決定しながら表現に慣れ親しむことができるようにした。時々起こるイベントで活動を活性化させ、他グループの様子を見るスパイ役も設定した。交渉を成立させるために、言い換えをしたり動作を加えたりなどして、あらゆる表現を駆使して伝え合う姿が見られた。



また、外国語の単元だけでなく、家庭科で学習した栄養グループをもとに、相手が喜ぶオリジナルメニューを作る活動を設定した。相手の好きなものや苦手なものを尋ね、栄養バランスを考慮したメニューを考えた。相手の返答に応じて、その場でどのように話せば良いか考えたり、中間評価という形で活動を捉え直すことで新たな気づきを獲得したりする姿が見られた。

目的や相手に応じて、その場でのやり取りを何とか成功させようと伝え方を変えたり新しい語彙を知ったりすることは、自分が使える言語材料の幅を拡げ、「学びのものさし」を更新するのに有効であった。

#### (2) ICT機器やポートフォリオ（学習の成果物）を活用し、内容面や言語面での気づきを記録することを通じた、次の学びにつながる省察の場の工夫

ICT機器の活用については、プレゼンテーションソフトやクラウド型協働学習支援ツールを活用して、伝えたいことを映像を見せながら話す活動を行った。その手立てにより、より他者に伝わりやすい映像を選び、それに合う英語を用いて話すことができていた。それに加え、映像を手掛かりにすることは、受け手側が相手の伝えたいことに興味をもちながら、発表を聞く意欲の向上にもつながった。

学習の成果物については、使用したワークシートや発表用の資料など、具体的な物で残り、蓄積していった。具体物が手元にあることで、話すときの素材となることが期待できる。6年生の終わりにポートフォリオを見返すと、自分のことや地域のこと、将来のことまで英語で話せる話題が蓄積していく。また、自分が知りたいことや話したい表現などを振り返る場を設けた。それらを次時の学習に盛り込むようにし、子どもの気づきから学びをつなげることで、「学びのものさし」の更新を図った。

目に見えない英語でのやり取りを積み重ね、活動の記憶として残すことも大切だが、目に見えるものを記録として蓄積していくことが、学びの手掛かりとなり次の活動につながる事が分かった。

### 2 課題 相手に配慮しながら、その場で使える表現を増やす活動内容の工夫

相手意識や目的意識を高め、外国語を使う必要感を生じさせる場の設定はできた。しかし、実際のやり取りにおいて、目の前の相手に配慮してコミュニケーションを図りつつ、自信をもって使える表現の幅を広げることには課題が残る。

子どもが語彙を増やしたいと思うのは、その必要が生じた時である。自分が使うことを前提とした新しい表現を取り入れた活動が重要である。「活動の目的・場面・状況が意欲をかき立てるかどうか」「相互の思いや願いを理解し合いながら自然なやり取りが生まれるかどうか」をよく吟味し、ポジティブに外国語を使う姿が見られるような活動を模索していきたい。

